

琴―近代日本クリスチャン女性の生活史―（三）

川村清志

四章 戦争の闇、栄の出征

一節 家族と生計

次女の誕生

昭和一二（一九三七）年五月、次女の牧子が生まれる。予定より一カ月近く遅れての出産であつた。予定は四月の終わりだったので、早くから産前休暇をもらつていた。しかし、なかなか生まれずに氣をもんでいたという。牧子のお守りをしてもらうため、隣町に住むお婆さんに頼むことにした。

琴にとっては信頼できるお婆あさんと、安心して牧子を任せることができた。連れ合いのお爺さんも氣楽なので

一緒にきていた。そのお婆さんは家の中のこともよくしてくれた。味噌漬けなどを作ってくれることもあり、とても助かったという。そのうえ、給金は日に五〇銭でいいと言ってくれた。お婆さんにしても家で若いお嫁さんといふより外にいたいらしく、喜んでできてくれたようである。

この年の七月七日、盧溝橋事件が勃発し、日本と中国の緊張は極限に達した。事件後の日本からの派兵を受けて、一九日、国民党の蒋介石は抗戦の意図を公のものとする。こうして七月二八日には、中国東北部において全面的な交戦状態に陥る。八月に入ると戦火は上海にも広がり、両国は泥沼の全面戦争へと突入していくことになる。栄が日記で「艱難時代」の到来を予感していた通り、日本を取り巻く世界の情勢は、急激に緊迫しつつあった。

ちょうどこの頃、再びジュールゲンセンが、共に伝道したいと言ってきた。琴自身も学校を止めたいと思っていたので、翌年の三月で退職することにした。日中戦争が始まってからは、神社参拝の問題などで皮肉を言う人が学校にもいたためである。清水小学校には四年間勤務し、退職金は二〇〇円だった。

ところが、思いがけないことが起きる。伝道を始めたのもつかの間、昭和二三（一九三八）年の秋にジュールゲンセンが、突然、心臓麻痺を起こして昇天（他界）してしまう。奥さんのネットイは、宣教師として引き続き教会に出席していたが、礼拝中もよく涙を流していた。信者の人たちも、気の毒でみていられない様子であったという。結局、彼女は、夫の死後半年ほど日本に留まっていたが、とうとう帰米することになった。

再び、宣教師からの援助が途絶えた。信者の献金では到底生活はできない。信者の数があまりに少なかったからである。しかも、若い信徒のなかには兵役に取られる者もあり、キリスト教が毛嫌ひされる風潮も始まっていた。信者の数は、減ることはあっても増えることはなかった。

琴は、もう一度、学校への就職の世話を頼みにいく。以前、紹介してくれた「視学」の方に実話を話して頼みみると、学校への推薦を約束してくれた。かなり力のある人だったようだと言ったと琴は語っている。

ここでいう「視学」は、戦前の地方の公教育制度において重要なポストであった。この役職は、明治二三（一八九〇）年の小学校令によって設置された「郡視学」や明治三〇（一八九七）年に設置された「地方視学」に端を発している。その職務は、学校教育に関して、その運営や教育が適切におこなわれているかを視察、監督することだった。視学のポストには、各地域の学校の校長職を在任したものが就任することが多く、今日で言えば各地方自治体の教育委員長のような立場に近かったと考えられる。

この視学の幹旋のおかげで、昭和一四（一九三九）年の四月から古新尋常小学校へ勤務することが決まる。しかし、この時の採用試験の時には「神社参拝に対して反対しないだろうな」と念を押された。死活問題だから曖昧に答えて苦しかったことを琴は記憶している。

この学校は、琴の家から割に近く、歩いて行く日が多かった。遅い日はバスで通ったが、毎日ぎりぎりに出るの遅刻することが多かった。朝礼では、先生方の視線を浴びて恥ずかしい思いをすることが度々あった。きつと、同僚からは厚かましいと思われるのだろう。その理由について琴は、次のように記している。

徹宗は学校に行きかけるし、牧子はおばあさんやおじいさんに見て貰うが、私が出かけると追いかけてきて、「お母さん」と呼ぶので、哀れになってついなだめたりして時間をとった。ある時には牧子連れて学校に行ったこともある。早めに出ようと思いつつも遅くなるので、遅刻も無精しているのではなく同情してもらいたい。

このとき、徹宗は六才、牧子は二才になったばかりである。母親としては、もっと子供の側にいてやりたい時期だった。牧師の妻として教会と信徒に奉仕し、家では二児の母、学校では先生という多忙な生活が続いた。

もともと、師範学校や奈良の教員時代の話を聞いたうえでは、彼女の遅刻癖が、子供たちにだけ帰せられるものだったかどうかは、やや心もとない。ちなみにこの時間のルーズさは、彼女の子供たちやその孫の一部に確実に継承されている。

栄の「内職」

この頃栄は、自分の説教を記した著書売りに個別訪問を続けていたが、ある人の紹介で、日本生命の外交員として働くことになった。幸いにも成績がよく、思ったより収入があった。月によっては、琴の月給を上回るほどだった。昭和一四年当時、琴の月給は四八円である。

また、二人は、琴が清水小学校を辞めたときの退職金で土地を買い、畑を作っていた。やがて、栄は二〇〇円で買った土地を七〇〇円で売り、一色町の方に一段以上（約五〇〇坪ほど）の土地を購入した。この土地では、鹿児島で購入して連れてきた馬二頭、子牛一頭を飼っていた時期もある。後に馬一頭は微発され、もう一頭は、荷馬車屋に貸して月ごとに貸し賃をもらっていた。何年かが経過すると荷馬車屋に譲渡する約束をしていたようである。牛を売った後は、イモやトウモロコシや野菜など、あまり手間のかからないものを作った。畑仕事はほとんど栄の仕事である。

家では、狭い教会の裏庭で鶏を飼っていた。多いときには、二段部屋にして十数羽を育てていた。鶏の餌にする

残飯は、二〇〇メートルほど離れた会社でもらっていた。毎日、バケツを下げてもらいに行き、時々、雌鳥が産んだ卵を分けていた。この仕事はもっぱら琴の係である。教会の風呂場で豚を飼ったこともあった。残飯をもらって帰る途中、偶然、勤務先の校長に出くわし、憐れむような目で見られたことを琴は記憶している。

昭和一五（一九四〇）年の夏が終わり、二学期が始まった頃、また、妊娠の徴候が現れた。学年の途中だったが、同僚の岡田という先生も辞めることになっていたので、一緒に二学期で辞めることにした。昭和一五年一二月である。これ以後は榮の保険外交員の仕事で生活することになる。こうして琴は、古新小学校では、一年八カ月奉職した。

二節 戦争の翳

キリスト教の変質

ところで、昭和一五（一九四〇）年の四月には、「宗教団体法」が施行されている。これは、国家による宗教団体の統制と監視を目的とした法律である。宗教団体を設立するさいには、文部大臣の許可が義務づけられた。これ以前から政治的な圧力を受けていたキリスト教のプロテスタント諸派は、当局への対応と妥協の結果、統一の教団の結成を目指すことになる。

もつとも、日本における統一の教派、ないしは会派の結成は、それ以前から模索されてはいた。しかし、それが実現に至るのは、当局からの圧力が本格化するこの時期になってからであった。ただし、その統一会派も、後に見るように国家権力への抵抗の拠点とはなりえなかった。

昭和十六（一九四一）年の三月、「合同教会創立委員会」が設立されている。ここで各教派の代表たちによって、海外からの経済援助や宣教師排除が採択された。各教派の信条や主張の隔たりは、皮肉にも当局からの圧力によって棚上げにされたわけである。こうして「日本基督教団」という単一のプロテスタントの宗教団体が誕生することになる。この団体には、三四のプロテスタントの教派が参加し、それぞれの教派の信条に沿って一一の部会に編成されていた。当時の信徒数は約二十四万人であつたとされる。

琴たちが属していた「日本聖書教会」も、その他の教派とともに第一〇部に属する形で、この日本基督教団に吸収された。もつとも、この部会制は後には解消され、教団自体が教義面において主導的な役割を發揮する局面はほとんどなかった。むしろ、教団は当局の政治的圧力の前に妥協を重ね、信仰の核心部分さえ奪われていくことになるだろう。

一方、この年の五月一日には、丸山家には三女の恵子が生まれた。出産の一週間前から、琴の母、奈良江が実家から来てくれていた。彼女は誰にも行き先を告げずに来てくれていたらしい。奈良江では、母が行方不明になつたといつて一騒ぎしていたようである。もつとも、琴にとっては、母がいてくれたというだけで、これまでより気楽なお産ができた。

母は「生まれ月の最初に（家に）入ってきた人が男だつたので、男の子が産まれる」と話していた。当時は、そのような言い伝えがあつたのだろうか。周囲の人達も男の子だろうと思つていたようだが、女の子だつた。恵子という名前は、それほど、意識してつけたわけでない。徹宗のときのように漢文の先生に決めてもらうことはなかった、とは著者がインタビューした際の琴の言葉である。

もつとも、恵子本人は、その意見には賛成しかねるようである。彼女がかつて聞かされたときには、次女の牧子はキリスト教の「牧者」、つまり、伝道師となるようにつけられ、彼女自身は、神からの祝福に「恵まれた子」になるように、恵子と名付けられたのだという。それは、琴自身が娘たちに話した内容のはずなのだが、彼女はそこを曖昧にしか覚えていない。

そして、この年の一二月八日、太平洋戦争が始まった。日本は、アメリカに対して宣戦布告を行い、ハワイ真珠湾に停泊していたアメリカ太平洋艦隊に急襲をかけた。これによって戦争は、第二次世界大戦へと拡大し、日本に未曾有の被害をもたらすことになる。

太平洋戦争以後、キリスト教会への統制と弾圧は徹底されていく。戦争がおきた翌年（昭和一七）には、日本基督教団第六部（元日本聖教会）、同第九部（元きよめ教会）に対する一斉検挙がおこなわれた。これは、かつて琴が属していたホーリネス系の教派にほかならなかった。この結果、一三四名の教職が投獄され、七名の牧師が殉職することになる。彼らのなかには裁判を受けることもなく、獄中の拷問によって殺害されたと考えられる者もいた。^{*2}

ホーリネス系教会への弾圧と前後して、日本基督教団の総理、富田満は、伊勢神宮に参拝し、皇祖神であるアマテラスに日本基督教団の成立を報告している。キリスト教の唯一神、「神」^{（ヤフイ）}もまた、皇祖神の下位に位置づけられることで、その命脈を保たざるをえなかったわけである。その後も教団は、頻繁に戦勝のための祈祷会を開き、また、戦闘機のための愛国機献納献金をおこなうなど、積極的に戦争に協力せざるをえなかった。それは、もはや「国家の統制と動員のために設立され、民間にあつて国策に協力する補完的存在」^{*3}に過ぎなかった。

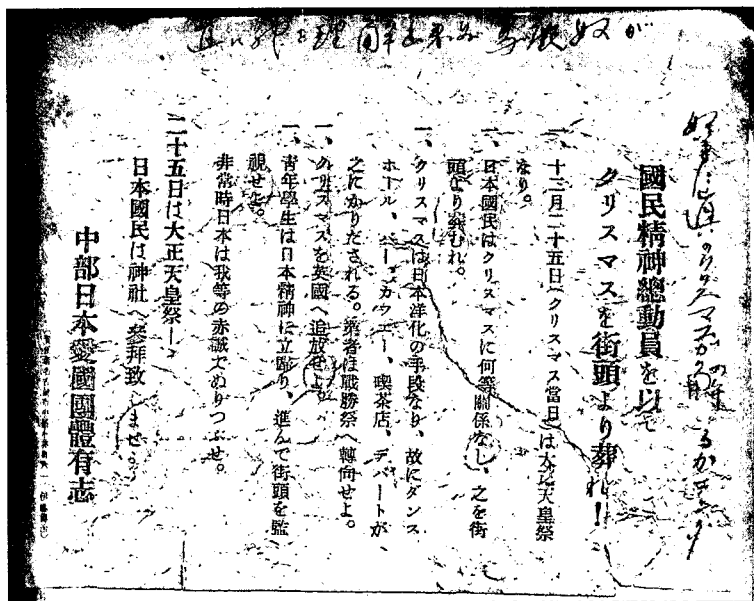
学校を辞めて少し落ちついた琴だったが、周囲にも戦争の翳が見え隠れしていた。教会を探る「特高」が、姿を見せるようになったと琴は手記に記している。

「特高」とはいうまでもなく、「特別高等警察」の略称である。それは明治四四（一九一）年に警視庁に設置された特別高等警察課を前身としている。その前年に起きた「大逆事件」を契機に設置されたことからわかるように、反体制的とされる社会主義・共産主義思想にもとづく活動を取り締まることを主な目的としていた。しかし、大正一四（一九二五）年の「治安維持法」制定以後は、全てのリベラルな思想、活動を弾圧する強権的な部隊として、キリスト教関係者の内定や摘発も数多くおこなうようになった。

琴によると「特高」は、最初は労働者のような姿で来ていたという。しかし、栄がずばずばとものを言うため、向こうも正面から来るようになった。話の上手い栄に特高の者も打ち解けて話をするようになった。「わしがこの管轄をやっとるうちは守つてやる」とまで言ってくれたそうである。また、徴用の手紙が三度も来たが、栄はどうやって断つたものか、一度も行かずに済んだと琴は語る。

ただこの間の状況については、ある程度の推量は可能である。栄は身長が低く、どちらかといえば、華奢な体格だった。そのため彼の兵役の検定は丙種であったことが日記などから伺われる。そのため徴用の優先度が比較的低かったのではないだろうか。もちろん、これも一概には言えず、なにか別の事情があつたのかもしれない。

琴自身も「キリスト教が毛嫌いされる傾向があつた」と記していたが、栄のスクラップブックには次のような「資料」も残されている。おおよそ次のような内容である（図一）。



国民精神総動員を以て

クリスマス街頭より葬れ！

一、十二月二十五日（クリスマス当日）は大正天皇祭なり。

一、日本国民はクリスマスに何等関係なし、之を街頭より葬むれ。

一、クリスマスは日本洋化の手段なり、故にダンスホール、バー、カフェー、喫茶店、デパートが之にかりだされる。業者は戦勝祭へ転向せよ。

一、クリスマスは英国へ追放せよ。

一、青年学生は日本精神に立帰り、進んで街頭を監視せよ。非常時日本は我等の赤誠でぬりつぷせ。

二十五日は大正天皇祭―

日本国民は神社へ参拝致しませう

中部日本愛國団体有志

この「中部日本愛國団体有志」がいかなる団体、内容

かを知ることではできなかった。いずれにせよ、その名が記すように国粹主義で排外主義的な思想の団体ないしは個人だったことは間違いない。このピラによれば、巷で盛んなクリスマスは「日本国民」とは何の関係もなく、その行事は日本を「洋化」するものである。そのような行事を街頭から葬り去り、さらに「英国へと追放」せよと断じる。この内容について栄は、ピラのまわりに「奴等に真のクリスマスが解るかてんだ」、「真に神を理解出来ぬ馬鹿奴が」と殴り書きしている。

もつともここで糾弾されている「クリスマス」とは、「ダンスホール、バー、カフェー、喫茶店、デパート」など商業目的のもとにおこなわれるものばかりである。「クリスマスを英国へ追放せよ」という記述があるとはいえ、キリスト教自体を批判しているわけではない。あるいは、栄が記す「神を理解出来ぬ馬鹿」とは、ピラを作った国粹主義者だけではなく、クリスマス本来の意味も知らずに、商業資本にのせられて騒いでいる人びとに向けられた悪態かもしれない。

詩吟の師匠

教会に最後まで来ていた小谷さんも召集で出征してからは、栄は詩吟に力を入れていた。琴が古新小学校に勤めていた頃である。聖書を朗読するときも、詩吟調ならば思いきり声を出せると考えたからである。

それ以前から、栄と琴は詩吟や剣舞を習っていたようである。次女の牧子を詩吟会に出したこともあった。また、名古屋中学寮の何かの会合で、栄が剣舞を琴が詩吟でダビデの弓の歌を吟じて謝礼をもらったこともあった。その時、琴は恥ずかしい思いしたが、後で周囲に褒められ恐縮したという。ちなみにダビデの弓の歌とは聖書の詩篇

に登場する。

実際、栄は詩吟の指導者を名のり表札もだしていた。詩吟の玄人とも交わりをもっていたようである。ある時には、放送局で「薩摩詩吟」の方法と歌について放送させてもらったこともある。栄が放送局に申し込んだところ、局からわざわざ迎えが来たと琴は語る。夫婦で連れだつて行き、謝礼を貰ってきたとのことである。

この栄が出演したラジオ番組や彼の肩書きを記した名詞は、スクラップブックのなかに残されていた。その記事は昭和一四（一九三九）年六月一七日のものである。名古屋中央放送局の午後五時三〇分からの三〇分間、放送されたようである。タイトルには、「趣味講演「薩摩詩吟の話」」となっている。また、放送局からの依頼状には、三〇分のうち、「御話又は唄方の説明を二十分間位説明して云々」とある。

ボール紙で作った衣装を徹宗に着せて楠正行に仕立て、栄自身は正成になって、剣舞を作り「青葉茂れる桜井の里の・・・」の歌をやるのを琴も手伝ったこともあった。そう琴は記している。

栄が歌ったのは、明治三二（一八九九）年に作られた唱歌で、冒頭の歌詞をとって「青葉茂れる」という名が付されているが、「桜井の訣別」とも呼ばれている。一四世紀の「建武の親政」の後、北朝を擁する足利尊氏と南朝の後醍醐天皇を奉じる楠正成が、雌雄を決した「湊川の合戦」の直前の様子を歌にしたものである。当時の国文学者、落合直文の歌詞に師範学校の教員であつた奥山朝恭がメロディーをつけたものである。決戦の場に向かうとする楠正成が、息子の正行に故郷へ戻るように諭す情景を描いている。六番までの歌詞が人口に膾炙しているようだが、参照までに一番と二番の歌詞を紹介しておく。

一 青葉茂れる桜井の

里のわたりの夕まぐれ

木の下蔭に駒とめて

世の行く末をつくづくと

忍ぶ鎧の袖の上に

散るは涙かはた露か

二 正成涙を打ち払い

我子正行呼び寄せて

父は兵庫へ赴かん

彼方の浦にて討死せん

いましはここまで来れども

とくどく帰れ故郷へ

楠正成は、この当時の「忠君」と「報国」を鼓舞する風潮で、きわめてポピュラーな歴史上の人物であつた。彼の天皇への忠誠と親子の愛情を描いたこの歌は、当時の家族国家観にもとづくイデオロギーを見事に体現している。観衆を意識しての設定かもしれないが、正成的なパーソナリティに榮自身が共感していた傍証となるのかもしれない。

い。剣舞を披露したのは、徹宗が正行と同じ一才になった頃のことである。長男を正行に仮託し、自らが歌詞を吟じる以上、そこには何がしかの感情移入があったはずだからである。

むしろ、このような歌詞でつづられた父子の剣舞を琴が記憶していたことにも注意を払うべきなのかもしれない。この曲の三番以後では、父と息子の相聞の歌詞が続く。正成は自らが湊川で討ち死にするむねをのべ、息子に故郷へ帰るようにうながす。しかし、息子の正行は、若干一歳でありながら、父に従って自らも戦いに身を賭す覚悟を歌う。改めて息子を説得する五番では、「行けよ正行故郷へ 老いたる母の待ちまさん」と締めくくっている。その父子の別れの姿そのものが、琴たちの家族を待ちうける出来事を暗示していたのかもしれない。

戦時下の生活

昭和一八（一九四三）年の八月一四日には次男、次郎が生まれる。生まれたときから、産婆さんが「この子は心配です」と話していたという。それでも、ともかく無事に生まれてくれたので、琴たちは安堵した。だが、発育が遅く一年過ぎてても、まだ這い歩きができなかった。そして、結局、次郎が立ち歩きできる日は訪れなかった。産婆の心配は現実のものとなる時がくる。

次郎が生まれて間もなく、石神堂町の家が開け渡しを言われたため、二キロくらい離れた矢田の方にある家を買った。こじんまりしていて少しくす暗く感じたが、裏庭が広かったので気に入った。また、隣のおばさんが優しい人で内心、安心したと琴は語る。ただし、この新居には何カ月もいなかった。同じ矢田町で通りに面した家を購入し直すことになる。前の家と買い換えたことになるが、買ったのは家だけで土地は借地のままであった。この家は、

以前に魚屋をしていたため表が土間になっている。そこに札拜に使う大きな腰掛け椅子を五、六脚置くことができた。この家にも畑を作れそう、かなり広い裏庭があった。大きなイチジクの木があり、秋にはおいしい実がなった。

家からは当時の国鉄の大曾根駅が近く、汽車の出入りが聞こえるほどだった。朝夕、近所の三菱工場に勤める人が通勤するので、表の道は賑やかになる。七月頃のことである。柴は朝顔の鉢を表に出して通勤の人に楽しんでもらおうと言い、毎朝、美しく咲いたものを選んで表に並べた。

だが、この頃からばち空襲が始まったと琴は記憶している。真昼でもザーツと屋根をかすめる音などで驚かされることもあった。家の床下に穴を掘って防空壕とした。戦争も進み、子どもたちの多くは学童疎開していた。また、中学生以上になると、軍需作業の手伝いにも動員された。

「体格の良い者は特攻隊として（飛行機で）自爆していく時代である。志願した者とはいえ、志願させられるような態度で学校の先生方も進めたからで、その時は最上の方法と思っていたのだから後の悲しみは深い」。そう、琴は記している。

戦争の影響は、日常生活にも浸潤し始めていた。空襲を恐れて、夜間は明かりをつけることが禁止された。空軍ができてからは国内であっても戦場のようなものである。竹槍の訓練は一度もやらなかったが、定期的に町内で消火練習が行われた。消火の道具は、町内会長の家の前に置いてあったが、琴が練習している近くに、会長が座っていることが多かった。まるで我が家を警戒しているようで不快な気持ちをしたと、琴は記している。

また、完全な配給制がしかれ、商品の売買が禁じられた。食料や衣類も自由に購入することができなくなり、陰

で売買する「闇」と言う言葉が出てきた。

なるべく自給できるように柴はよく畑を作った。特に手のかからないイモや麦などを育てた。自分の退職金で買った畑だったが、琴自身が訪れることはほとんどなかった。畑が矢田の家から遠いことと、三人の子供の世話に追われて家を離れられなかったためである。

石神堂町にいた頃には、一度恵子を負って畑を見に行ったことがある。しかし、畑に行ったのはそれ一度きりだった。往復の移動が想像以上に大変だった。その代わりに、この頃には徹宗がついていき、父の手伝いをする事があった。

すでに記したように魚捕りの好きな柴は、この頃でも、時々、釣り竿や網をもつてでかけていた。鮎やコイの他に、ウナギが捕れることもあった。ある時には大きな亀をつかまえてきて、家族で食べたこともある。また、海に行ったときにはフグをとったこともあった。悪いところは全部取ったから大丈夫だ、だが、子供には食べさせないでおこう、と二人で料理して食べた。

「お豆腐のようでおいしかったが、もしあたって子供だけ残したらどうするつもりなのか、なんて考えなかったのだからわからない。『信ずるものには……毒を飲むとも害を受けず』の信仰だったのか、主の憐れみだったのか。そんなふうに琴は旧懐している。

しかし、その一方で柴は、「配給のもので足らなくなっても闇に手を出すな」と言い、「もし正しく生活して命が持たない時は、天に向かって『神様、あなたを信じて明るい生活をしていこうとしてこんなことになりました』と言つて、死ねばいい」と家族には語っていた。

三節 栄、出征

召集令状

昭和一九（一九四四）年の一〇月、栄のもとに一枚の封書が届いた。召集令状である。徴用を三度まで断った栄だが、これには従わざるを得なかった。召集令状を拒めば、その家族の者が捕らわれるとの話がささやかれていた。その日から出征の日までの様子を琴は次のように記している。

一月早々、栄は近所の人々の送る言葉とともに、兵士として出征することになった。誰に相談するという肉親もおらず、ただ信者の梶川きん子姉が見送りに来て下さった。次郎の着物を着せて下さったり、どんなにか頼もしく思ったかしない。ただ一人の助け人だった。駅まで見送りに行ったが、汽車に乗る時も、私は何も言えなかった。ただ一人徹宗が「お父さん、行つていらつしやい」と大きな声で行ってくれたのが助かった。

駅から帰りに皆さんに礼を言ったかどうかも憶えていない。ただ、何だか葬式の後の帰りみたいだと、襲ってくる思いを振り切ろうとした記憶が忘れられない。とにかく召集令状が来てからの自分は放心状態だったんだろう。てきぱきと主人の出征の準備をしてやれるような強さがなく、彼のなすのを見ていただけだった。栄は自分がいなくなると生活費が何もなくならないと思ひ、生活保護を受けることができるようにしてくれた。本当に彼はよく行き届く人だと今更ながらにありがたいと思った。

「放心状態だった」という琴とは逆に、栄は残していく家族のためにできる限りのことをした。琴たちのために

生活保護の給付も申し込んでいたという。栄はかつて「俺は良い人間だと解ってもらったら、そこを去るようにして今までやってきた。」と琴に語ったという。その言葉を、彼女は後に改めて思い出すことになるだろう。

栄は、故郷の鹿児島に戻る途中で、琴の実家にも挨拶のために立ち寄った。そこで栄は、琴の母に「きつと帰ってくる」と語ったという。琴は奈良に戻ってから、その時の様子を母から聞いた。琴の母はその言葉を信じて、「栄さんはきつと帰ってきはる」と琴に言ってくれた。もちろん、琴もそう信じていた。しかし、その言葉が果たされることはなかった。

栄が出征してまもない一二月のはじめには、大きな地震があった。

そう、琴は記憶している。これは、おそらく、この年の一二月七日に起きた東南海地震のことだろう。いわゆるプレート型地震で、震源地は東海道沖、規模はM七・九とされている。被害は近畿から北陸まで一三府県におよび、死者二二三名、負傷者二八四名、全壊家屋、三四九四六軒をかぞえた。琴の住んでいた愛知県はもつとも被害が大きく、死者四三八人、負傷者一一四八人、全壊した家屋は一六五三軒にのぼった。他県で被害が大きかったのは、四〇三人の死者と六〇七名の負傷者をだした三重県、二九五名の死者と八四三名の負傷者をだした静岡県がつづく。この地震では津波が発生し、沿岸部での被害が大きかったようである。

琴は子どもたちを抱き抱えて机の下にもぐり込んだ。どれだけ長くいたかわからないが、子供たちを守るのは自分一人であることを痛感する。四人の子どもたちは、それぞれ徹宗一才、牧子七才、恵子三才、次郎一才だった。

栄は一二月に佐世保の海軍に入隊するという連絡があったさき、いつ出発したのかも分からなかった。琴が佐世保に送った手紙も、着いたかどうかさえ定かではない。琴は、小さい四人の子どもたちとともに声を出して祈りを

捧げるだけだった。三女の恵子は汽車の音が聞こえると「お父さん、じき帰ってくると言ったのになかなか帰らない」と呟いた。

栄は、この佐世保に入隊する前に一端、故郷の鹿兒島に戻っている。そのとき出征していく兄を出迎えた内の一人、弟の喜納が、そのときの様子を語ってくれた。喜納によれば、二人で祈っているとき、喜納は「聖霊に満たされて聖書の言葉を三カ所、指し示した」という。「異言」と同じく自分ではどこを指し示したのか、その時はわからない。だが、その聖句によつて兄は、自分はもう生きては戻れないこと、しかし、敵とはいえ人を殺すことなく天に召されることを悟ったのだという。

ちなみに喜納自身は三度の軍隊経験を持っている。最初は、昭和八（一九三三）年に初めて兵隊に徴用されて昭和一一（一九三六）年まで、二度目は昭和一二（一九三七）年八月から一四年まで軍に属した。そして、三度目の昭和一五（一九四〇）年から終戦までは、衛生兵としてアジアの各地を従軍した。彼はずっと聖書を持って食事の時も寝る前後も祈っていたが、上官からも何も言われなかった。

彼もまた、何度も死地に遭遇した。マニラに向かう船に乗っていた時、あと二時間で着くというところで、別の船と衝突してしまう。軍服を着ようとして帽子を探していたが、瞬く間に浸水が始まった。やっと別の船によじ登り、振り返ると、ものの一分もしないうちに、船は暗い海のなかに沈んでいった。その時、喜納は、「どんな危険なときでも、主が守ってくれることを知った」という。彼は他にも中国で看護部隊として移動した隊が、翌日には全滅した事件や、戦後に交通事故で一命を取りとめた話などを語り、「神の恵み」について語ってくれている。ところで、栄は戦地に赴くにあたって、遺書を記している。

遺書

神の御導きによりて夫婦となり今日に至る。今日までの事、色々□□失火鶴を言う□□□のぞみ言ふ事なけれど母として体を大切に長生きせよ□。夫たる小生への恩返しと心得へよ。子等は一人残らず基督教僧侶とせよ。されど自給出来る様自活の道を得させしより後に□□主任とせよ。

女の子には成人の仕度させしめば五百円づつを得へよ。二郎に千円を得へ畑の小さい方を與へよ。徹宗は家と其の中の凡の物と畑の大きい方を全部所有させよ。何物にも與えられし物をゆづることなく余が涙さい流し忍耐して得たる此等の者より大いなる□□を得しめよ。

又残りの貯金は幾万に達するとも徹宗に與へよ。汝は智き人なれば汝の方□□に従ひて此を活用し又此にて□を待弟妹をたすくるに□□□□□。余の墓は十字架にせよ。汝と墓を並べよ。墓は教会堂所有敷地とし信者の墓とそこにふやす様にせよ。神、與へ給へば斯る事の許さるる所に礼拝堂を建て伝導館は町の中にせよ。在が許さるるなれば徹宗や二郎は進学し神学博士になり神学校の教授となり皇道的基督教を宣布する僧侶を生み出さしめよ此が汝が最後の務と心得へよ。重ねて言う。長生きせよ。

琴子殿

夫 丸山 栄

この文章には、当時の複雑な時代状況が透けてみえる。文章の多くは、琴を始めとする家族のことにあてられている。琴の長生きを願い、子供たちの成長後の姿を望んでいる。さらにこれまで二人が作り上げた財産の相続分を示している。長男の撤宗以外にも子供たちのそれぞれに財産を分与することが明記されている。

この他にも墓を十字架にすること、琴の墓と並べることなどが書かれているが、これらの文面には時々、奇異な感を受ける言葉が登場する。「基督教僧侶」という表現はまだしも、「皇道的基督教」とは一体、どのような教えを指すのだろう。この遺書がどのような経緯でかかれたものか、琴も覚えていない。後年、この遺書を見た娘の牧子や恵子は、この文章が検閲のもとに書かれたと想像している。つまり、このような表現は、全て当時の天皇制に表面的に従った文言であり、栄の真意は他にあると考えている。

その真偽はさておき、栄がもつとも望んだこと、それが妻、琴自身の長生きであり、子供たちを伝道者として世に送り出すことであつたことは、ここで確認しておきたい。

琴の語りに戻ろう。

次男の死

年が変わり昭和二〇（一九四五）年になると、空襲もいよいよ激しさを増してきた。正月などあつたものではなかった。琴が徹宗を疎開させなかったのは、小さい恵子や次郎の世話を手伝ってもらうためであつたという。

当時、ラジオが東京、大阪などへの空襲の様子を放送していたという。防空壕に入ってみるものの、どれだけ効果があるのか分からない。ガラガラという焼夷弾の音やその破裂する音があちこちで響いてくる。今回は助かつた

が、いつ自分たちに向かってくるかもしれないと思う日々であった。

長男の徹宗によれば、空襲のたびに爆弾のかげらがぼんぼんと落ちてきたという。その頃は、近くの六郷の小学校に通っていたが、空襲の翌日に学校に行くと、校庭には焼夷弾で亡くなった死体が並べられていた。それらの死体をまたがないと校舎にはいれない、そんな状況だったという。

資料によると名古屋の空襲は、東京や大阪での空襲と同じく苛烈なものであった。先に琴が「ぼちぼち空襲があった」と述べているが、最初に名古屋が空襲に見舞われたのは、昭和一七（一九四二）年の四月一八日である。アメリカの空母「ホーネット」から発進したB二五爆撃機二機が、名古屋市内六カ所に投弾し、死者八名、負傷者三名の被害をもたらしたのである。

空襲が本格化するのは、昭和一九（一九四四）年の一二月に入ってからである。この年の七月にサイパン島守備隊が玉砕したことで、日本本土は空襲の射程距離に入った。名古屋では、特に三菱重工が、東京の中島飛行機、八幡の製鉄所などとともに爆撃対象として重視されていた。

実際、昭和一九年一二月一三日の空襲では、「三菱発動機第四工場」が標的となったのをはじめ、名古屋各地に爆弾と焼夷弾が投弾され、死者三三〇人、負傷者三五六人の被害をだした。さらに二月一八日には、「三菱航空機大江工場」、「大同製鋼大江工場」などを中心に、死者三三四人、負傷者二〇七人を数える被害をだしている。

昼間でもB二九が来たという声に、おそろおそろ空を見上げることも度々であった。寒い夜中でも、子どもたちを起こして防空壕に逃げ込まねばならないので、牧子と恵子が風邪を引き、熱を出してしまった。こうなっては、空襲と言われても防空壕には入らず、布団を頭から被って神様に任せることにした。神の御旨ならば、どこにいて

も助かるし、また、死ぬのだと思うようになった。防空壕の入り口に焼夷弾が落ちて出られず、防空壕で焼死したり、窒息死したりしたという話もあったという。

二人が風邪を引いても、ただ静かに寝かすばかりではない。熱で喉がかわくのだろう。二人はミカンを欲しがったが、なかなか手に入らない。町組の組長さんが訪ねてくれたときにその話をしたところ、どこで手に入れられたのか、ミカンを二個持つてきてくれた。二人は一個のミカンにとっても喜んだが、琴自身もこんなに嬉しいことはなかったという。

だが、もつと辛い出来事が、琴たちを襲うことになる。少し長くなるが、琴自身が記した経緯を以下に紹介する。

やっと二人が元気になってくれてほっとしたのも束の間で、今度は次郎が顔を真赤にして食欲もなく、風邪でもないようで解らない。昼間でも空襲警報がでるので、なかなか医者にも連れていけないが、無理を承知で徹宗に牧子と恵子を頼んでおいて、一番近い岡田病院に次郎を背負っていった。そして、薬をもらって飲ましたが、一週間ほど立つても少しもよくならず、もう一度連れていくと医者は、「これはうちでは駄目だから紹介する」と言って外科医へ行くように言われたので、すぐに連れていくと「もう手遅れだ、男の子やのに残念」と言うなり、喉の皮を破られた。

次郎の「ヒュー」と叫んだ声は、いまだに思い出すと涙が出てくる。何と無茶な医者だろうと思いきや情けなくなつた。その後、一週間足らずで死んだが、その間も割合に牛乳を飲んだり、もしや治ってくれるものならと思うと、医者へ行ったことがかえって悔やまれた。丁度、大空襲と言われた三月二三日の前日から、何も食べずかなり苦

しそうだったので、ただ祈りながら終始枕元にいたが、二三日の早朝、心拍が止まったようである。

空襲後も子供たち三人が組長さんたちとともに防空壕に行ったが、私は次郎とともにいた。

空襲が解除になって、家に帰ってきてても何も言えない。私が食事の準備をしている時だったか忘れたが、牧子が次郎の寝かせてあるベッドをのぞきながら「次郎ちゃんなんで死ぬんや」と言っているのが聞こえて堪らない思いをしたことが甦る。

二四日に栄の弟の隆さんが来てくれてミカン箱のなかへ次郎を入れて、自転車で焼き場のある覚王山まで運んでくれた。葬式も何もできない死体がごろごろしているときである。二日後に骨を取りに来なさいと言うので、私が歩いて覚王山まで取りに行った。

二三日の空襲で途中の道も多くの建物が焼けてなくなっていた。もちろん、市電も走らないし、何処をどう行つたか分からないが、覚王山の方を目指して歩き通したので、どれだけ歩いたかしかない。帰ってみると草履のかかとの所が表まで摺り切れていた。

夫の出征の後に襲った次男の死である。この話は、何度かのインタビューでも語られることはなかった。彼女にとつても最も辛い経験だったからかもしれない。

次郎の死を悲しんでいる間もなく、琴の家の並びの一带に疎開せよとの命令がきた。すぐ裏に三菱の寮と工場があったからだろうという。空襲の際の延焼を避けるためである。

通りの向かい側に空き家があり、ひとまずそこへ移ることになった。その家はすでに一家そろって田舎に疎開し

ていた。家財道具を運び込んだあと、近所の者が集まって家を壊した。畳を取り出し、壁を叩いて土を落とす。縄を柱の要所に引っかけて何人かの人が引っ張ると、琴たちの家はいつも簡単に瓦礫の山となった。

「何でも築くのはなかなかだが、壊すのは早い。貧困のなから貯めて買った家が台無しとなった。だが、生死すら分からぬ時である。ただ、呆然と人々の様を眺めるはかなかった。」そう、琴は記している。

引っ越し先の向かいの家では、雨漏りに悩まされた。雨が降るとどこに逃げようかと思う程、あちこちで雨漏りがした。二階建ての家だったが、雨の日には、全員階下に降り、二階にはバケツや洗面器を並べる。運んできた荷物を片づける余裕もなかった。

この頃、以前世話になった名古屋中学の校長先生が、学校に長椅子を預かると言ってきた。教会用の椅子が一〇脚足らずあったので、大太鼓とともに預けた。また、学校でイモ作りをするから、土地を貸してくれと言う。琴は前後の考えもなく、青写真と一緒に渡してしまった。「この頃は、こんなに前後の考えもなく、どうでもせよ、何でも持っていけといった状態であった」。

荷物になる着物もほとんど処分してしまった。仕立て直せば立派な外出着になる服も、大きな籠に取り混ぜて小物買いの商人に譲ってしまった。後に琴は、牧子や恵子の嫁入り支度の際にこの時のことを思い出し、惜しいことをしたと思ったという。

奈良への帰郷

それからしばらくして、二、三軒隣りの家から三枚のハガキが届いた。全て母からのハガキばかりで「奈良へ帰っ

て来なさい」という内容であつた。家が壊されたために送り先が分からず、向かいの家にまとめて預けられたらしい。琴から返事が来ないために何度もハガキを出してくれた母を思うと、琴は感無量だつた。奈良に帰ることさえ思い浮かばず、呆然として過ごしていたが、目を覚まされた思いであつた。

同じ頃、琴の兄の一人が、名古屋に様子を見に来てくれたので、帰郷の相談をする機会があつた。兄は奈良も食糧難は同じだし、終戦も見越して名古屋の方がかえつて良くなるかもと思つたようであつた。それでも、「まあ、帰つてきなさい」と言い、「力になります」とも言つてくれた。しかし、彼は引越しの手続きの間に病床につき、急死してしまふことになる。

同じ組の人にも話したところ、それがいいと言つて帰郷の手伝いをしてくれた。近所のお婆さんの一人は、「奈良には爆弾など落ちないようですな」と言い、「今度の戦争は日本が負けるそうだ」とすでに四月の頃に語つていた。疎開の荷物は、二五キログラムを五個までと制限されていた。半分以上の家財道具を残していかなねばならない。これらの荷物は、組長の山田家と信徒だつた梶川家に預かつてもらつた。何度かに分けて奈良に運ぶつもりだつた。教会で使つていたオルガンを運ぶのは大変だつた。裏の板を外さねば、一個分として運べない。名古屋駅までは、自転車と大八車で積んでいった。ところが、その古い自転車までが、駅で盗まれてしまふ。

ようやく奈良に帰ると、母一人の家には、すでに姉の靖己子の夫婦と美智子の三人の先客があつた。その中へ琴と子供たち四人が加わつて、八人が同居することとなつた。三畳、四畳半、六畳の三間のうち、一番広い六畳に入れてもらつた。役所での手続きや学校の転校手続きなどが忙しく、落ちついたのは五月になってからである。徹宗と二人で名古屋に通い、荷物を運んだ。重い石臼もリュックに入れて背負つて帰つた。柴が作つた麦を粉にして使

うためである。

ちなみに、琴が奈良へ疎開する時期と前後して、名古屋は、もつとも激しい空襲に見舞われることになった。琴も利用していた国鉄の大曾根駅は、昭和二〇（一九四五）年四月七日の空襲によって全壊し、三〇〇名を超える死者を出した。さらに五月の一四日の空襲では名古屋城と徳川園が、同一七日の空襲では、熱田神宮の本殿が焼失し、あわせて八〇〇人以上の死者と二〇〇〇人を超える負傷者をだしている。

奈良に帰ってから空襲が何回あったが、名古屋のことを思うと静かなものであった。だが、市内の開化天皇陵に小さい爆弾が落ちて、一軒の家屋が焼かれたことがあった。そのため、次の空襲が起きたときに琴の姉の靖己子は、市内の大安寺町に住む親戚の家まで母や子供を連れていった。ところが、そこで「何という格好で来るんや、みつともない」と言われたという。姉は、「こんなときに格好もないのに情けないことを言うわ」と言って怒っていた。名古屋で空襲に慣れていた琴は、恐ろしくもなかった家で留守を守っていた。そのため、兄妹たちのやりとりを直接聞かなかったが、靖己子姉と同感であったという。昭和二〇年も七月の声を聞く頃のことであった。

註

- *1 土肥昭夫1980『日本プロテスタントキリスト教史』新教出版社、352。
- *2 ホーリネス・バンド昭和キリスト教弾圧史刊行会編一九八三『ホーリネス・バンドの軌跡…リバイバルとキリスト教弾圧』新教出版社、参照。
- *3 土肥昭夫1980『日本プロテスタントキリスト教史』新教出版社、357